オープンダイアログ・アプローチによる ピアサポート・ファシリテーションの可能性と課題

―認知症家族会を対象としたナラティヴ分析―

○　駒澤大学　荒井　浩道（5909）

オープンダイアログ，ピアサポート，ファシリテーション

１．研 究 目 的

これまでピアサポートは，専門的支援と対比的、あるいは対立的に論じられてきた．ピアサポートのアドバンテージは，同じ経験を共有する当事者同士の支え合いに求めることができる．

しかし，まったく同一の経験を有する当事者は存在しない．同じ認知症患者を介護する家族であっても，その経験は，介護する患者の認知症の種別や程度，介護者の性別や患者との続柄などによって質的に異なる．当事者同士だからといって必ずしも支え合えるわけではなく，コンフリクトが生じる危険もある（荒井 2013）．

さらに認知症家族会の場合，当事者としての経験をもたない社会福祉士，介護支援専門員などの専門職が交流会の場に参加することも少なくない．このような専門職は，グループにおける中心的役割を担うことが期待される。たとえば，交流会において司会を務め，ファシリテーションを行う機会も多い．しかし，ピアサポートのファシリテーションは，一般的なカンファレンスのそれとは視点や方法が大きく異なる（荒井 2014）．

このようなピアサポートのファシリテーションを考えるうえで，「オープンダイアログ（Open Dialogue)」(Seikkula and Arnkil 2006）は示唆的である．オープンダイアログは，従来的な専門性のあり方に懐疑の眼差しをむけるナラティヴ・アプローチと同系譜のアプローチであり，非専門的なピアサポートとの親和性は高い．

そこで本研究は，オープンダイアログ・アプローチを手がかりに，認知症家族会における交流会のより良いファシリテーションのあり方を検討することを目的とした．

２．研究の視点および方法

本研究は，オープンダイアログ・アプローチにもとづいた発表者自身の実践事例を対象にナラティヴ分析（Flick 2007=2011，Riessman 2008=2014）を行った．

本研究の視点であるオープンダイアログ・アプローチは，ナラティヴ・アプローチに分類されるコラボレイティヴ・アプローチ（Anderson 1997=2001)とリフレクティング・アプローチ（Andersen 1991=2001）と類似点の多い方法論である．統合失調症の治療法としてフィンランドで開発され，2014 年以降，日本でも急速に注目を集めている．オープンダイアログ・アプローチの特徴は，クライエントの発話を統制せず，不確実性に耐えながら会話を続ける（対話）という点に求められる．

本研究では，このオープンダイアログにもとづき発表者自身が認知症家族会の交流会のファシリテーションを行った．対象となる認知症家族会は，ある法人が設置し，継続的に運営するもので，交流会への参加者は，その法人の特別養護老人ホームやデイサービスの利用者や家族，職員，外部専門職，ボランティアなどから構成される．発表者は 2012 年 4 から 2015 年 7 月（予定）までの期間に開催された 34 回のうちの 28 回において 1 回 2 時間程度のファシリテーションを行った．交流会での言語的営みを速記で記録したうえで，対話形式の逐語録を作成し，ナラティヴ分析の手法を用いて分析を行った．

３．倫理的配慮

本研究の実施においては，一般社団法人日本社会福祉学会研究倫理指針を遵守した．各回の交流会では，冒頭で発話内容の研究利用について口頭で説明し，参加者全員の承諾を得た．発表する研究内容については認知症家族会の責任者に文書で説明し，文書で承諾を得た．逐語録の作成においては個人が特定されないように匿名化した．

４．研 究 結 果

オープンダイアログ・アプローチにもとづき，参加者の発話の統制を放棄し，不確実性に耐えながらファシリテーションを行った結果，①ヒューリスティック（探索的），かつ②ポリフォニック（多声的）なナラティヴが紡がれた．また，③参加者同士の相互的なファシリテーションが行われた．さらに，④擬音語・擬態語（オノマトペ），ユーモアの多用が確認された．

５．考 察

オープンダイアログ・アプローチは，当事者性をもたない専門職が，当事者性が重視されるピアサポートの言語的なファシリテーションを可能にする．今後の課題として，ピアサポートのファシリテーションにおいて，オープンダイアログ・アプローチを適用することの効果に関するエビデンスを積み上げる必要がある．

【文献】

Andersen, T. (1991) The Reflecting Team: Dialogues and Dialogues about the Dialogues, Norton. (=2001, 鈴木浩二監訳『リフレクティング・プロセス会話における会話と会話』金剛出版.)

Anderson, H. (1997) Conversation, Language, and Possibilities: A Postmodern Approach to Therapy, Basic Books. (=2001, 野村直樹・青木義子・吉川悟訳『会話・言語・そして可能性―コラボレイティヴとは？ セラピーとは？』金剛出版.)

荒井浩道（2013）「〈聴く〉場としてのセルフヘルプ・グループ―認知症家族会を事例として」伊藤智樹編『ピア・サポートの社会学―ALS，認知症介護，依存症，自死遺児，犯罪被害者の物語』晃洋書房，33-68.

荒井浩道（2014）『ナラティヴ・ソーシャルワーク― “〈支援〉しない支援”の方法』新泉社.

Flick, U. (2007) Qualitative Sozialforschung, Rowohlt. (=2011, 小田博志監訳，山本則子・春日常・宮地尚子訳『新版 質的研究入門〈人間科学〉のための方法論』春秋社.)

Seikkula, J. and Arnkil, T.E. (2006) Dialogical Meetings in Social Networks, Karnac Books.

Riessman, C. K. (2008) Narrative Methods for the Human Sciences, Sage. (=2014, 大久保功子・宮坂道夫訳『人間科学のためのナラティヴ研究法』クオリティケア.)

【謝辞】

本研究は，JSPS 科研費 24730471 の助成を受けた．